の総称です。記録によれば、山王祭は承応元年（1652年）、八幡祭は享保3年頃（1718年頃）が起源といわれています。

初めから屋台があったわけではないようです。今のような屋台のある祭は、享保3年頃から始まったといわれています。神様を乗せて氏子の地域内を曳き回す御巡幸（ごじゅんこう）に使われました。その頃は、荷車に陣幕を張ったような質素なものだったようです。

元禄5年（1692年）に江戸幕府は、豊富な山林資源と地下資源（金・銀・銅・鉛）を持つ飛騨高山を、直接支配する地「**天領**」としました。これにより、次第に江戸文化が流入します。

高山祭の屋台の**屋根の伸縮構造**に着目すると、それが江戸の祭屋台の構造を模していることが分かります。

江戸では、御巡幸のコースに江戸城の城門があったため、山車（江戸の祭屋台の呼び方）はそれをくぐらなくてはなりませんでした。

城門よりも高い山車の屋根の骨組みを工夫し、綱や滑車を使った仕掛けによって上下方向にスライドさせていたのです。

これは、現在の高山祭の屋台にみられる特徴の一つで、各屋台蔵に収納する時や町内を曳く時は、屋根をスライドさせて低くします。

江戸の経済

ところが当の江戸では、享保6年（1721年）八代将軍**徳川吉宗**による**享保の改革**の倹約令「**奢侈禁止令**／しゃしきんしれい」によって、当の江戸の山車は禁止されてしまいます。

幕府や諸藩の財源を支えていたのは、農民が納める年貢米でしたので、米相場の安定が重要でした。

かつて農業（第一次産業）は最も重要な産業で、農民は人口の約8割を占め、幕府も諸藩も、農村の維持や農民の掌握を徹底し、禁令を課すなどして厳しく年貢を徴収しました。

幕府には、全国の金山・銀山からの収入もありましたが、やがて産出量も減少し、財政は苦しくなります。そこで、米の生産性を向上させるため、土地の開拓、堤防・農業用水路などのインフラ整備、農具や肥料の改良が盛んに行われました。

しかし、米の生産量ばかりが増えても相場が下がるだけです。当たり前です。財政難を解消するには至りませんでした。

一方農民は、この政策のおかげで米の生産性を上げることができ、農作業に多少の余裕が生じます。米以外の作物の栽培や、嗜好品や生活物資の生産が各地で行われるようになり、**自給自足**の暮らしを送っていた農民がこれらを販売することによって、今まで無縁だった**貨幣**を得るようになり、他所から品物を購入するようになります。

しかし、優れた農具や質の良い肥料は高価なものでしたので、結局は働きずくめ。農民の生活は、さほど楽にはなりませんでした。

また、工業・漁業・林業など（2次産業）も大きな発展を遂げ、次第に嗜好品や生活物資の需要が高まります。さらに、陸路・航路が整備され流通・交通（三次産業）が充実し、それらの商品の流通を担う商人は大きな利益を上げます。

高山への影響

そんな中、各地では、天災によって引き起こされる飢饉や米不作が続きます。各藩の大名は幕府から復興やインフラの再整備を命じられ、経済負担を強いられていました。

その幕府も、江戸で大火が相次ぎ、復興に莫大な費用を投じました。

やがて、米の相場を意図的に操作して、収益を上げる商人があらわれます。

幕府でも各藩の大名でも、このような領内の金持ちの商人や大地主から金を借りるようになり、その返済をめぐるトラブルが生じることもありました。

このような農民や町人の不満が爆発し、各地で一揆や打ちこわしが起きます。

江戸時代の経済は、実に混沌としていたのです。

しかしこのような時代でありながら、高山ではその後も改修が行われるなどし、屋台は残りました。

今の屋台のような形態や構造になったのは、江戸時代後期の文化文政時代（1804年～1830年）の頃からです。

江戸末期になると、「**旦那衆**／だんなしゅう」と呼ばれる人たちが中心となって、盛大な屋台の改修が行われます。

旦那衆とは、材木・金貸し・酒造・流通関係などで富を蓄えた高山の大商人たちのことです。

江戸文化の影響を受けたベースに、旦那衆は京風の優雅で豪華な趣向を取り入れました。屋台造りの工匠たちの技を競わせ、屋台はますます絢爛豪華になり、全体の形の美しさを誇るもの、金具や漆工や織物に重点をおくもの、彫刻や車に特徴を持つものなどが作られるようになりました。

各地で起きた一揆や打ちこわし。飛騨も例外ではなく、金森城主や代官・郡代がこれらを恐れ、**民衆の心の安定のために祭りを奨励した説**

あまりに裕福になり過ぎた**旦那衆の財力を、祭や屋台に散財させて衰えさせるため説**

江戸では倹約令によって幕府の財政立て直しが行われていたにも拘わらず、なぜ高山では、それに反して屋台の改修が繰り返されたのでしょうか？

金森家が幕府に対して、**祭行事を盛んにして平和をよそおう説**

天領とはいえ、飛騨は遠く離れているため、**管理が行き届かなかった説**

天領ゆえ、**飛騨の匠の技の継承・発展のため、祭屋台を改修し続けることが公共事業的な特例として認められた説**

さまざまに言われています。

観光都市の歩み

昭和9年に高山線が開通しましたが、日中戦争・太平洋戦争突入によって高山の発展は長らく足踏み状態でした。

戦後の混乱が収まると、昭和20年代後半から30年代にかけて全国的な登山ブームが起き、高山は北アルプスを目指す登山客に注目され始めます。高山駅を利用する帰りの登山客が、列車を待つ時間潰しに高山の町を散策し、予期せず豊かな自然・昔の町並み・伝統工芸が残っていることに気づきます。それは語り継がれ、また、著名人や文化人がメディアで紹介したことによって、それを目当てに高山を訪れる人が次第に増えていきました。

昭和45年に国鉄が**高度経**

曳き揃えの歴史

高山祭屋台の総曳き揃えは、過去にも行われていました。市の記録によると、観光客向けなど春・秋の高山祭の屋台が集結することがあったそうですが、昭和37年を最後に取りやめになっていました。

また、春の高山祭・秋の高山祭は開催区域が分

総合生活雑誌「暮らしの手帖」の中で、飛騨高山は全国に紹介された（S38.12号）

また、女性ファッション雑誌「アンアン」「ノンノ」の創刊により、落ち着いた町並み・静かな宿場などが若い女性を中心に観光地として注目され始めます。

高山もそれらのブームに乗り、昭和45年には年間66万人程であった観光客数は、翌年には年間100万人を超え、その5年後には200万人を突破しました。

現在では、春・秋の高山祭の4日間だけで約30万人の観光客が訪れます。

済成長による豊かな物質文明と引き換えに失われつつある古き良き日本を求めるため、**ディスカバージャパン**という全国キャンペーンを行います。

この度の「**高山祭屋台の総曳き揃え**」では、昨年行われた**高山市制施行80周年**を記念したイベント「**高山祭屋台からくり競演**」でからくりを披露した**布袋台**（ほていたい）と、新たに秋の高山祭の**神楽台**（かぐらたい）が中橋を渡って春の区域に入り、陣屋前広場に4臺のからくり屋台と、春・秋それぞれの神楽台が集結。獅子舞と闘鶏楽が演じられた後、からくりが次々と披露されました。

また、櫻山八幡宮境内では、飛騨山王宮日枝神社と櫻山八幡宮の獅子舞と闘鶏楽の競演が行われました。

イベント初日、陣屋前広場の6臺以外の屋台は、各屋台蔵を出発して上二之町と下二之町の通りに並べられました。一本の通りに17臺の屋台が勢ぞろいした様は実に壮観。昼過ぎから雨が降り、それを避けるため屋台はそれぞれの屋台蔵に戻りましたが、夕方には日差しが戻り、全23臺の屋台が上一之町と下一之町に揃いました。日が暮れると、提灯をともした春と秋の屋台が交互に安川通りへ入り、大勢の市民や観光客がそれを見守